

小糸 楓子（こいと・ふうこ） 湘南白百合学園高等学校 2年
作品名 キリストのまなざし
読んだ作品 『沈黙』

テカテカに光った褐色の板。表面のわずかな凹凸から赤ちゃんを抱いた人のような形が見える。私は、踏み絵に直接触れたことがあります。当時小学校低学年だった私には、踏み絵という一枚の板の背景にあった様々な衝突や人々の苦悩についてよくわかっていませんでした。『沈黙』を読み、信仰とは何か、生きるとは何か、この一枚の板が語るメッセージの重さを知りました。

どうして神はずっと沈黙を続けていたのか、私は司祭とともに何度もこの問いにぶつかりました。祈ることは神との対話であり自分と向き合うことだと私は信じてきたのに、この作品では、神が司祭をはじめとした信者たちに正しい道を示したり助言をしたりするという場面は全くありません。「迫害が起こって今日まで二十年、この日本の黒い土地に多くの信徒の呻きが満ち、司祭の赤い血が流れ、教会の塔が崩れていくのに、神は自分にささげられた余りにもむごい犠牲を前にして、なお黙っておられる」という司祭の言葉に、私は深く頷きました。神は本当に存在するのだろうか、と司祭ですら疑ってしまう場面もある中で、最も神を近くに感じていたのは貧しい名もなき人でした。神の存在を信じ、信仰を捨てまいと必死に祈る人々は、祈ることで生かされ、祈ることで生涯を閉じ神のもとへ旅立つ姿に、私は神の存在に矛盾を感じながらも、強く、尊いものを見ました。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。（コリントの信徒への手紙四章十八節）」私は、作品を読みながら、この言葉が浮かんできました。絵踏みをするのは目に見える行為、信仰は目に見えない自分の軸となる思い。聖書の中で自分の弱く醜い部分とされる足で、キリストやマリア像を踏むことは到底認められません。しかし、見えないものに目を注ぎ、踏むという選択が人々の頭の片隅に少しでもあったならば、命を失うことはなかったかもしれない。

私が見た踏み絵は、マリア像が彫刻されていたようで、これはマリア像ではないと思えば納得できると思われるほど、人々に踏まれて原型を留めていませんでした。もし禁教時代に自分が絵踏みをするようになったら、私はどうしただろうか。絵を踏むことで心の中の信仰が全て消えるわけではない。目に見えない心の中の信仰は持ち続けることができる。細い糸のように信仰を繋いでいくことこそが神の望みだと私は思いたい。いや、でもやはり踏むことはできない。踏んだ私を神が罰することはないと思うが、踏んではいけないと自分の心にブレーキがかかる。踏めない。殉教した信者たちにも、この心の葛藤があったはずだ。信仰か命か、究極の選択を強いられた司祭の立場になってみると、殉教者の思いを背負い、赦しを求めながら生きる、命を優先する決断を神に示すことが信仰の証になると考えます。この世に生を受けた私たちには、生きるという使命があります。隣人を自分のように愛する使命があります。聖書の教えの通りに素直に生きることがどれほど尊く、しかし難しいこと

か、踏み絵を前にした全ての信者の苦悩がこのことを証明しています。「こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。」司祭はこの時初めて神の存在に気づいたでしょう。ペトロの罪を引き受け、彼の信仰がなくならないようにキリストが祈る、聖書のあの場面に重なっています。十字架に向かうキリストのまなざしを感じたはずで、司祭がずっと求めていたものが、この瞬間にやっと訪れたのです。私が見た板の鈍い光は、たくさんの方々の様々な思いが幾重にも重なって作られたのだと思います。そして、人々はその数だけキリストのまなざしを感じていたのではないのでしょうか。

この『沈黙』には、「神の沈黙」と「絵踏みをする人々の沈黙」という両者の沈黙があると私は考えます。正しい決断は存在しないが、自分が行くべきだと思ふ道を進みなさい。あなたの苦しみは私の苦しみでもある。どんな道を選んでも、私はいつもあなたの隣にいる、という心の内に届く神からのメッセージ。一方で、キリストやマリア像の絵を踏む瞬間、心の中で手を合わせ神に向かって赦しを求めていた人々の静かな祈り。私は、その時その場所に訪れた沈黙こそが信仰の証だと確信しました。

神と人との間に言葉を通したやりとりはなくても、人々は神に対する思いをそれぞれの心の内で反響させ行動を起こすことで、神に対する信仰をし、神はその姿をじっと見守っているに違いありません。沈黙の中にあるとても深い対話こそが、人々に対する神の最大の愛の証なのです。